

鄭喬林本『三国志伝』について

中川 諭

『三国志演義』が成立して後、数多くの版本が次々と出版された。そのうち現存する最も古い版本は、嘉靖元年に刊行されたとするいわゆる嘉靖本である。(しかしその出版年等については検討の余地はある。)万暦年間以降になって、多くの書肆がさまざまな版本を出版し、現在数十種類の版本が世界各地の図書館・蔵書機関に蔵されている。そのうち、明代末期から清代初中期にかけて最も流行したのは、『三国英雄志伝』と題する簡本系の版本である。

ドイツ・ベルリン州立図書館に『三国志演義』の版本が一つ蔵されている。巻一巻頭書名を『新刻全像演義三国志伝』といい、二十巻本である。封面があり、框郭内右側に「李卓吾先生評」と題し、中央に大きく「全像古本三國誌傳」と記し、さらに左側下に「德馨堂藏板」、框郭上に「康熙廿三年新鐫」と記す。首巻には李漁の署名の入った序文・「全像三國志目錄」がある。また巻一書名の横には、「晋 平陽 陳壽志傳／元 東原 羅貫中演義／書林 鄭喬林梓行」と記す。上図下文の形式で、本文の行款は、半葉十七行、図像の左右各三行三十七字、図像の下十一行行三十字である。各半葉の図像の上に標題を記す。版心上部の象鼻に

「新刻三國志傳」と題し、最下部には「喬」字がある。巻末に牌記はない。巻九の第十一葉以降、巻十三の第十四葉以降、そして巻十七の第九葉以降の三個所には、美玉堂本の文章が紛れ込んでいる³⁾。封面と巻一巻頭の題署によって、この本は康熙二十三年に清代の書肆鄭喬林徳馨堂によって刊行されたものであることが分かる。(以降「鄭喬林本」と簡稱する。)ベルリン州立図書館のホームページに、この本の写真が掲載されている。

鄭喬林本について、孫楷第『中国通俗小説書目』等歴代の目録には著録されない。筆者の『三國志演義』版本の研究³⁾、魏安『三國演義版本考』⁴⁾等においても言及されない。筆者が最近発表した『三國英雄志伝』に関するいくつかの論文において鄭喬林本に言及するも、詳しい考察は行っていない。

よって本稿は鄭喬林本を取り上げ、この本の性質と『三國志演義』諸版本の中における位置づけを考えようとするものである。

二

鄭喬林本は上図下文の形式であり、書名を『三國志伝』と称しているのであれば、同様の形式・書名を持つ二十巻繁本系ないしは簡本系「志伝グループ」と関わりが大きいのではないかと予想される。では実際鄭喬林本はどの系統に属するのだろうか。

まず次の例を見てみよう。呂布は陳宮の計略に従い、濮陽の富豪田氏に曹操のもとへ密書を届けさせた。曹操は軍勢を三つに分けて、濮陽に進んで行った。初更の時分、田氏の使者の言うとおり城門が開くと、曹操は城の中へ入り州の役所を目指したが、城内に誰もいない。曹操は計略にかかったと知るや退去を命ずる

が、その時四方から火の手が上がり、曹操は城内を逃げ回った。

○鄭喬林本卷二「陶謙三讓徐州」

周日校本 ⁽²⁾	余象斗本 ⁽²⁾	朱鼎臣本 ⁽³⁾	楊美生本 ⁽³⁾	鄭喬林本
<p>却說曹操見典章，殺出去了。四下裏人馬截來，不得南門，再轉北門。火光裏，正撞見呂布，挺戟躍馬，追殺曹操。操加鞭縱馬過去，呂布從後拍馬趕來，用戟於操盔上一擊，問曰，曹操何在。操反指曰，前面騎黃馬者是也。呂布棄了曹操，拍馬趕前面的。曹操撥轉馬頭，却望東門而走。正逢典章，章大呼曰，南門已崩，可急出東門。典章殺條血巷，到門道，火焰甚盛，城上</p>	<p>却說操見典章，殺出去了。四下衆人馬截來，出不得南門，再轉北門。火光發中，正見呂布，挺戟躍馬，追殺曹操。布從後拍馬趕來，用戟去操盔上一擊，問曰，曹操何在。操急指曰，前面騎黃馬是也。布棄了操，拍馬去趕前面的。曹操撥轉馬頭，却往東門而走。正逢典章，章大叫曰，南門已崩，急出東門。章殺條血路，到門道傍，火焰甚急，城上</p>	<p>操見典章，殺出去了。四下裡截來，出不得南門，再轉北門。火光中，見呂布，挺戟躍馬追殺，中，見呂布，挺戟，躍馬</p>	<p>將戟去盔上一擊。呂曰，曹操何在。操急指曰，前面騎黃馬者是也。布棄了操，拍馬去趕黃馬。操向東門而走。正逢典章，大呼曰，南門已崩，急出東門。典章殺條血路，到城門邊，火焰甚烈，城上</p>	<p>將戟去盔上一擊。布曰，曹操何在。操急指曰，前面騎黃馬者是也。布棄曹操，去趕黃馬。操向東門而走。正逢典章，大呼曰，南門已崩，急出東門。典章殺條血路，到城門邊，火焰甚烈，城上</p>

<p>推下柴草，遍地紅 罩。典 戟撥開， 飛馬冒烟突火先 出。曹操却好到門道 邊，城樓上 崩下一 條梁木，正打 曹操 戰馬後跨。馬倒處， 曹操用手托梁倒於火 中，手執梁臂，髭鬚 髮盡都燒毀。典章到 壕邊，正逢 夏侯淵， 兩個同 入， 起曹公，突火 而出。 淵即抱操 於馬上，典章殺條大 路而走。曹兵呂兵 在城外，接住混 戰，直殺到天明，操 軍 自回寨中，衆 皆拜 於地上，與操 稱賀。操仰面笑 曰，悞中匹夫之計。 吾必當報之。郭嘉曰， 計可 速發，必擒 呂布。</p>	<p>推下柴草，遍地紅 罩。韋用戟撥開， 飛馬冒烟突火 殺 出。操却好到門 邊，城樓上 崩下一 條梁木，正打着 操 馬後跨。馬倒 操用手托梁倒於火 中，手 臂 鬚 髮盡都燒毀。 韋到 壕邊，正逢着夏侯淵， 兩個 又 入城救主 衝突 而出。夏侯淵 抱操 於馬上， 韋殺條大 路而走， 兩軍在城外 混 戰，直殺到天明，操 兵 自回寨中，衆將 皆 於地上，與操 稱賀。操仰面 嘆 曰，悞中匹夫之計。 吾亦當報之。郭嘉曰， 計可 速發，必擒 呂布矣。</p>	<p>推下柴草，遍地通紅。 韋用戟撥開， 飛馬冒烟突火 殺 出。操却 到門 邊，城 門崩下一 條梁木，正打着 操 馬後跨。馬倒， 操用手托梁到于火 中，手 臂 鬚 髮盡都燒毀。 韋到 壕邊，正逢 夏侯淵， 兩個 又殺入城救 操， 冲突 而出。夏侯淵 抱操 于馬上，典章杀條 人路而走。</p>	<p>推下柴草，偏地通紅。 用戟撥開火， 飛馬冒 火 殺 出。</p>
<p>推下柴草，遍地紅 罩。典 戟撥開， 飛馬冒烟突火先 出。曹操却好到門道 邊，城樓上 崩下一 條梁木，正打 曹操 戰馬後跨。馬倒處， 曹操用手托梁倒於火 中，手執梁臂，髭鬚 髮盡都燒毀。典章到 壕邊，正逢 夏侯淵， 兩個同 入， 起曹公，突火 而出。 淵即抱操 於馬上，典章殺條大 路而走。曹兵呂兵 在城外，接住混 戰，直殺到天明，操 軍 自回寨中，衆 皆拜 於地上，與操 稱賀。操仰面笑 曰，悞中匹夫之計。 吾必當報之。郭嘉曰， 計可 速發，必擒 呂布。</p>	<p>推下柴草，遍地紅 罩。韋用戟撥開， 飛馬冒烟突火 殺 出。操却好到門 邊，城樓上 崩下一 條梁木，正打着 操 馬後跨。馬倒 操用手托梁倒於火 中，手 臂 鬚 髮盡都燒毀。 韋到 壕邊，正逢着夏侯淵， 兩個 又 入城救主 衝突 而出。夏侯淵 抱操 於馬上， 韋殺條大 路而走， 兩軍在城外 混 戰，直殺到天明，操 兵 自回寨中，衆將 皆 於地上，與操 稱賀。操仰面 嘆 曰，悞中匹夫之計。 吾亦當報之。郭嘉曰， 計可 速發，必擒 呂布矣。</p>	<p>推下柴草，遍地通紅。 韋用戟撥開， 飛馬冒烟突火 殺 出。操却 到門 邊，城 門崩下一 條梁木，正打着 操 馬後跨。馬倒， 操用手托梁到于火 中，手 臂 鬚 髮盡都燒毀。 韋到 壕邊，正逢 夏侯淵， 兩個 又殺入城救 操， 冲突 而出。夏侯淵 抱操 于馬上，典章杀條 人路而走。</p>	<p>推下柴草，偏地通紅。 用戟撥開火， 飛馬冒 火 殺 出。</p>
<p>推下柴草，遍地通紅。 韋用戟撥開， 飛馬冒烟突火 殺 出。操却 到門 邊，城 門崩下一 條梁木，正打着 操 馬後跨。馬倒， 操用手托梁到于火 中，手 臂 鬚 髮盡都燒毀。 韋到 壕邊，正逢 夏侯淵， 兩個 又殺入城救 操， 冲突 而出。夏侯淵 抱操 于馬上，典章杀條 人路而走。</p>	<p>推下柴草，偏地通紅。 用戟撥開火， 飛馬冒 火 殺 出。</p>	<p>推下柴草，偏地通紅。 用戟撥開火， 飛馬冒 火 殺 出。</p>	<p>推下柴草，偏地通紅。 用戟撥開火， 飛馬冒 火 殺 出。</p>
<p>推下柴草，偏地通紅。 用戟撥開火， 飛馬冒 火 殺 出。</p>	<p>推下柴草，偏地通紅。 用戟撥開火， 飛馬冒 火 殺 出。</p>	<p>推下柴草，偏地通紅。 用戟撥開火， 飛馬冒 火 殺 出。</p>	<p>推下柴草，偏地通紅。 用戟撥開火， 飛馬冒 火 殺 出。</p>
<p>推下柴草，偏地通紅。 用戟撥開火， 飛馬冒 火 殺 出。</p>	<p>推下柴草，偏地通紅。 用戟撥開火， 飛馬冒 火 殺 出。</p>	<p>推下柴草，偏地通紅。 用戟撥開火， 飛馬冒 火 殺 出。</p>	<p>推下柴草，偏地通紅。 用戟撥開火， 飛馬冒 火 殺 出。</p>

この例を見ると、二十四卷系の周日校本と二十卷繫本系の余象斗本の文章は簡本系の朱鼎臣本・楊美生本に比べてはるかに長い。例えば、周日校本には「追殺 曹兵、操加鞭縱馬過去、呂布從後拍馬」という文章が見え、余象斗本にも多少の文字の異同はあるもののほぼ同様の文章が見える。しかし朱鼎臣本・楊美生本には該当する文章はない。その他、引用の最後の部分の曹操の台詞の中で、周日校本と余象斗本にはいずれも「吾必（亦）當報之」の一句があるが、朱鼎臣本と楊美生本にはない。このように、簡本系統の文章は繁本系統に比べて簡略になっている。しかし朱鼎臣本と楊美生本はいずれも簡本系統に属するとはいえず、文章の簡略化された状況には違いがある。朱鼎臣本には曹操が火攻めに遭った具体的な描写が見える。すなわち、典章が戦火を突き抜け、曹操を助け出そうとした時柱が倒れてきて、曹操の腕・髪・鬚は皆焼かれてしまった。その後典章は夏侯惇と曹操を救い出して陣屋に帰っていった、という描写がある。文章は余象斗本と比較的近い。しかし楊美生本にはこの描写はない。このように、簡本系統の版本の間にも文章の簡略化のしかたに違いがあり、これがすなわち簡本系統の「志伝グループ」と「英雄志伝グループ」の違いである。ここに示した例では、「英雄志伝グループ」の文章が「志伝グループ」の文章より短くなっている。逆に「志伝グループ」の文章が「英雄志伝グループ」よりも短くなっている例も存在する⁽¹⁰⁾。さて鄭喬林本の文章を見ると、「英雄志伝グループ」の楊美生本と大差はない。周日校本や余象斗本よりも簡略な文章になってることから、簡本系の版本である。そして朱鼎臣本に見られるような、曹操が火攻めに遭って典章・夏侯惇に救われるという描写がない。このことから、鄭喬林本は簡本系の「英雄志伝グループ」に属する版本であろうと考えられる。

「英雄志伝グループ」に属する版本は、さらに二つの小グループに分けられるのであった。すなわち冒頭から最後まで全て簡略な文章になっている完全簡本『三国英雄志伝』のグループと冒頭十二則に二十四卷系

の文章の影響を受けている、いわゆる「先繁後簡」のグループである。⁽¹⁾それならば、鄭喬林本はどちらの小グループに属するのであろうか。

完全簡本『三国英雄志伝』と「先繁後簡」の『三国英雄志伝』の違いの一つは、劉備・曹操・孫堅それぞれの初登場場面における、それぞれの幼い頃のエピソード（少時説話）の有無であった。では鄭喬林本ではその劉曹操少時説話はどうなっているのであろうか。ここでは曹操の少時説話を例に挙げてみよう。皇甫嵩と朱雋は官軍を率いて黄巾賊軍を火攻めにしたところ、賊軍は大敗し、張梁と張宝は敗軍を率いて逃げて行った。その逃げ道を遮るように、突然一隊の軍勢が現れた。

○鄭喬林本卷一「劉玄德斬寇立功」

为首閃出一個好英雄，身長七尺，細眼長髯，胆量过人。机謀出衆，咲齊桓晋文无匡扶之才，論趙高王莽少縱橫之策。用兵彷彿孫吳，胸中熟諳韜略。官拜武騎都尉，沛国譙郡人也，姓曹名操，字孟德，乃漢相曹參二十四代孫。操曾祖曹節字元偉，仁慈寬厚。有隣人失去一猪，與節家猪相類，登門認之。節不與爭，使驅之。去後二日，失去之猪自归，主人大慚，送还節，再拜伏罪。節咲而納之。其人寬厚如此。節生四子，第四子名騰字季興，桓帝朝为中常侍，後封費亭長。子曹嵩，原是夏侯氏子，過房与曹騰为子，因此姓曹。嵩为人忠厚純雅，官拜司隸校尉。灵帝拜為大司農，迁大鴻臚。嵩生操，小名阿瞞，一名吉利。操年幼時，好飛鷹走犬，喜歌舞吹弹，少机警有权数，游蕩无度。叔父怪之，言其過于曹嵩。匕每鞭撻操，匕忽心生一計，一日見叔父来，詐倒于地敗面喞口。叔父慌問之，操曰，猝中風耳。叔父归告于嵩，操潜地归家，嵩驚而問曰，汝中風已痊乎。操曰，自来无此病，但失爱于叔父，故見罔耳。嵩乃信其言，後叔父但言操過失，嵩並不听，因此操得意意放蕩，不務行業。時人未之奇也。惟有喬玄一見曹操，指而言曰，天下将乱，非禽世之才，不能济也。能安之者，其在君乎。南陽何顯見操言，漢室将亡，安天下者，必是此人也。汝南許劭有高名，操往見之，問曰，我如何人也。劭不荅。又問劭曰，子

治世之佞臣，乱世之奸雄也。操喜而謝之。年二十，孝廉为郎，除洛阳北都尉。初到任，渠衙門，各設五色棒十餘條，有犯禁者，不避豪傑，皆棒責之。灵帝所喜小黄門蹇硕的叔父，提刀夜行，操巡夜拏住，就棒責之，由是内外莫敢犯者，威名頗震寰宇。後为頓丘令。因黄巾賊起，拜为騎都尉，引馬歩軍五千，前来潁川助戰，正值張梁、張宝敗走，曹操攔住，大杀一陣，斬首万餘級，奪得旗幡金鼓馬正極多。

鄭喬林本の文章は、曹操が初めて登場した時、まず曹操の人となりと曹操の祖先のことを紹介し、それから曹操が幼い頃叔父に対して嘘をついたこと、喬玄・許劭による曹操の人物評価、曹操の任官後のエピソードが書かれる。そしてその後再び『三国志演義』の主要なストーリーにもどり、曹操が黄巾賊の行く手を阻む様子が描かれる。一方完全簡本『三国英雄志伝』の一つである楊美生本は、同一の場面を次のように描いている。

○楊美生本「刘玄德斩寇立功」

閃出一人，身長七尺，細眼長鬚，胆量過人，官拜武騎都尉，沛国譙郡人也，姓曹名操字孟德。引馬歩五千，前来潁川助戰，正遇張梁、張宝敗走，被操攔殺一陣，斬万餘。

楊美生本の文章はただ曹操の人となりを紹介するのみで、すぐに『三国志演義』の物語の本筋へと続いている。鄭喬林本に見られたような曹操の祖先や自分自身の若い頃のエピソードは描かれていない。このことから、鄭喬林本は、書名こそ『三国志伝』と題しているけれども、劉曹孫少時説話を持つ「先繁後簡」小グループに属する版本だということが分かる。

三

鄭喬林本が「英雄志伝グループ」の「先繁後簡」小グループに属するのであれば、鄭喬林本の文章はこの小グループの中でどのような位置づけになるのだろうか。続いて、鄭喬林本の文章について詳しく検討していく。

筆者は「致和堂本『三国英雄志伝』について」という論文の中で、鄭喬林本・致和堂本^(註)・嘉慶七年本^(註)の関係について、次のように述べた。

簡本「英雄志伝グループ」の中では鄭喬林本・嘉慶七年本と比較的に近い関係にあるが、鄭喬林本を底本としているわけではなく、また鄭喬林本の底本となっているわけでもない。致和堂本と鄭喬林本は並列の関係にある。また嘉慶七年本はその文章の性質や刊行年からして、致和堂本や鄭喬林本より一段階遅れる版本であると考えられる。

鄭喬林本など「先繁後簡」の三本が並列の関係であるならば、「先繁後簡」小グループ内における諸本の親疎の関係はどのようになっているのであろうか。

まず次の例を見てみよう。曹操は江東を攻めようとしたが、北方の兵士たちは水上での戦いに慣れていないため、多くの兵士たちが船の上で病気になってしまった。龐統は曹操軍の状況を見て、計略を授けた。曹操は龐統の計略に従い、大小の船すべてを鎖で繋ぎ、その上に大きな板を敷くと、人も馬もみなその上を歩けるようになり、病気になった兵士たちもみな治って、曹操は心配がなくなった。曹操は得意になって勝利

を確信し、大きな船の上で宴会を開かせた。夜遅くまで酒を飲み、月は昼のように明るく、その時カササギの群れが北から南へ飛んでいった。

○鄭喬林本卷八「曹孟德橫槩賦詩」

劉興我本	楊美生本	鄭喬林本	致和堂本	嘉慶七年本
<p>操問曰、此鴉緣何夜鳴。左右荅曰、鴉見月明、將謂天曉、故離樹枝而鳴也。操然其言、</p> <p>令 取槩、</p> <p>立于缸頭 上、取酒洒 于江中、自滿飲三爵、橫槩與諸將曰、吾持此槩、破黃巾、擒呂布、滅 袁術、收袁紹、 深入 北塞、直抵遼東、縱橫天下、 乃大丈夫之志也。</p>	<p>操問曰、此鴉緣何夜鳴。左右荅曰、鴉見月明、將謂天曉、故離樹枝而鳴也。操然其言、</p> <p>令 取槩、</p> <p>立于缸頭</p> <p>北塞、直抵遼東、縱橫天下、 乃大丈夫之志也。</p>	<p>操問曰、此鴉緣何夜鳴。左右荅曰、鴉見月明、將謂曉矣、故離樹 而鳴也。操 又咲不止。此 時酒酣、 教取槩、 立于缸頭之上、取酒 奠于江中、 滿飲三爵、橫槩与諸將曰、吾持此槩、破黃巾、擒呂布、滅 袁 紹袁術、深入塞 北、 直抵遼東、縱橫天下、 真乃大丈夫之志也。</p>	<p>操問曰、此鴉緣何夜鳴。左右荅曰、鴉見月明、將謂天曉、故離樹枝而鳴也。操 又笑不止、此 時酒酣、 教取槩、 立于船頭之上、取酒 奠于江中、 滿飲三爵、橫槩與諸將曰、吾持此槩、破黃巾、擒呂布、滅 袁 紹袁術、深入塞 北、 直抵遼東、縱橫天下、 真乃大丈夫之志也。</p>	<p>操問曰、此鴉緣何夜鳴。左右荅曰、鴉見月明、將謂天曉、故離樹枝而鳴也。操然其言、</p> <p>令 取槩、</p> <p>立于缸頭</p> <p>北、 直抵遼東、縱橫天下、 乃大丈夫之志也。</p>

この例を見ると、鄭喬林本と致和堂本はいずれも「又咲不止。此時酒酣」となっているところが、劉興我本・楊美生本・嘉慶七年本は「然其言」となっていて、鄭喬林本と致和堂本は異体字の違いがあるだけで、

基本的に文字は一致している。劉興我本の文章を鄭喬林本・致和堂本と比べてみると、この個所以外はわずかな文字の違いがあるだけで、内容は基本的には一致している。楊美生本の文章と劉興我本を比較してみると、劉興我本に見える「上、取洒洒于江中，自滿飲三爵，橫槩與諸將曰，吾持此槩，破黃巾，擒呂布，滅袁術，收袁紹，深」という文が、楊美生本にはない。楊美生本の「立于缸頭」は地の文であるが、「入北塞」はもともと曹操のセリフであり、文章が続いておらず、文意が通じない。これは楊美生本の誤りであろう。嘉慶七年本の文章は楊美生本とよく似ているが、嘉慶七年本にはある「曰，吾持此槩，破黃巾，擒呂」字の誤り）布，滅二袁」の文字が、楊美生本にはない。その他の三本にはいずれもこの文があり、よって嘉慶七年本が楊美生本のような文章をもとに文字を補充したものではないだろう。この例のように、鄭喬林本の文章が致和堂本に近く嘉慶七年本といささか異なる例は、比較的多く見られる。このような例から、鄭喬林本の文章は嘉慶七年本よりも致和堂本により近いと考えられる。

他にも同様の例がある。劉備は江陵で曹操と戦って敗れ、甘・糜夫人と公子阿斗の行方が分からなくなってしまった。趙雲は一人で二夫人と阿斗を探し、まず甘夫人を見つけ、それから糜夫人と阿斗も見つけた。糜夫人は阿斗を趙雲に託し、自ら命を絶った。趙雲は阿斗を抱えて劉備のもとに向かった。途中曹操の武将鍾繇と鍾晋が趙雲の行く手を阻んだ。ここでは周日校本の文章も挙げる。

○鄭喬林本卷七「張翼德涓水斷橋」

劉興我本	楊美生本	鄭喬林本	致和堂本	嘉慶七年本	嘉慶七年本
					鍾繇乃河内人也，自幼學儒，後來

<p>又被子龍</p>	<p>來，馬，挺，戟，趕，見，鍾，紳，落</p>	<p>趙雲，被雲刺死。 縉，輪，斧，來，鍾 戰，戰，戰</p>
<p>又被子彪</p>	<p>來，馬，挺，戟，趕，縉，見，落，鍾，紳</p>	<p>趙雲，雲刺死 縉，輪，斧，來，鍾 戰，戰，戰</p>
<p>腦，砍去一半。 靑紅劍，連盔帶，手掣出</p>	<p>來，將戟，在子彪後心裡影弄。子彪大怒，攙轉馬，</p>	<p>鍾縉兄弟二人攔住趙雲，趙雲見，追兵趕來，大喝一聲，逕取鍾縉。縉揮大斧而迎。兩馬相交，戰不三合，一鎗刺鍾縉于馬下，衝路便走。鍾紳要報兄仇，挺方天戟趕來。</p>
<p>腦，砍去一半。 靑紅劍，連盔帶，手掣出</p>	<p>來，被子龍，撥過畫，手掣出</p>	<p>前鍾縉，當，攔住趙雲，趙雲，大喝一聲，逕取鍾縉。縉揮大斧而迎，戰不三合，一鎗刺鍾縉于馬下。鍾紳要報兄仇，挺方天戟趕來。</p>
<p>又被子龍</p>	<p>來，馬，挺，戟，趕，見，鍾，紳，落</p>	<p>趙雲，刺死鍾縉，縉，輪，斧，來，鍾 戰，戰，戰</p>
<p>腦，削去一半。 靑紅劍，帶盔連，手掣出</p>	<p>來，被子龍，隔過畫，手掣出</p>	<p>棄文就武，與夏侯惇做副將。當日，攔住趙雲，趙雲見背後追兵又至，大喝一聲，逕取鍾縉。縉揮大斧來迎，兩馬相交，戰不三合，一鎗刺鍾縉於馬下，衝路便走。背後鍾紳要報兄讐，持方天戟趕來，馬尾相啣，那枝方天戟，只在子龍後心內弄影。子龍大怒，攙轉馬，却好兩臂相拍，被子龍左手</p>

走。 望長坂 橋而	刺死、
走。 望長坂 橋而	刺死、
走。 望長坂 橋而	鍾紳落馬、 餘者 奔回。 子彪得脫、
走。 望長坂橋而	鍾紳落馬而 死。 餘者盡皆奔回。 子龍得脫、
走。 望長坂 橋而	刺死、
望長阪 而來。	紳落馬而 死、 餘者盡皆奔回。 趙雲 得脫、

この例を見ると、鄭喬林本と致和堂本の文章は、明刊本の劉興我本・楊美生本よりも長い。たとえば、鄭喬林本には「鍾縉兄弟二人攔住趙雲，趙雲見追兵赶来，大喝一声，逕取鍾縉」の一文があり、致和堂本はいくらか文字の異同があるものの、ほぼ同じ文章がある。一方、劉興我本・楊美生本にはこの文はない。その後、鍾紳が趙雲と戦うところ、劉興我本はただ「鍾紳見縉落馬，挺戟赶来，又被子龍刺死」とだけあって、簡単な描写になっている。鄭喬林本には「鍾紳要報兄仇，挺方天戟赶来，将戟在子彪後心裡影弄。子彪大怒，撥轉馬，右手撥過屋戟，左手掣出青紅劍，連盔帶腦砍去一半，鍾紳落馬，餘者奔回」という文章があって、劉興我本よりも複雑な描写になっている。そして致和堂本の文章は鄭喬林本と大差なく、わずかな文字の違いがある程度である。この例では、鄭喬林本の文章が致和堂本に近く、劉興我本・楊美生本と違いが大きい。劉興我本・楊美生本はいずれも明刊本であり、鄭喬林本と致和堂本は清刊本である。刊行年からすると、劉興我本と楊美生本が先にあり、鄭喬林本と致和堂本の方が遅れるはずである。それならば、鄭喬林本に見られる文章は、後から補ったもののようにも思える。しかしながら周日校本を見ると、鄭喬林本に見られる文章は周日校本にも見られ、しかもさらに詳しい内容になっている。繁本系の周日校本の方が『三国志演義』の元の形を留めているであろうから、文章の繁簡、そして文章中に使用されている語彙を考慮すると、まず周日校本のような繁本系の文章があつて、それを簡略化して鄭喬林本のような文章ができあがり、

それをさらに簡略化して、劉興我本のような文章ができあがったはずである。一方で、嘉慶七年本は「先繁後簡」小グループに属するはずであるが、この一段の文章については、劉興我本・楊美生本と同じになっている。(この点については、稿を改めて考えたい。)

以上二つの例は、いずれも鄭喬林本と致和堂本の文章が近く、かつその他の『三国英雄志伝』と異なっているものである。この二例によれば、鄭喬林本と致和堂本は近い関係にあると考えられる。

しかし次のような例も存在する。劉備は曹操と下邳で戦って大敗し、袁紹を頼って河北へ行った。曹操は続いて関羽を攻め、関羽の軍を囲んだ。関羽は仕方なく、しばらくの間曹操に降参することにした。曹操は袁紹と戦ったが、袁紹配下の大将顔良と文醜はきわめて強く、曹操軍は太刀打ちできない。その時関羽は劉備が袁紹のもとにいるとは知らず、曹操のために出陣して顔良と戦い、顔良を討ち、さらに二度目の出陣では文醜を討った。袁紹は関羽が顔良と文醜を討ったことを知り、大いに怒って劉備を斬ろうとした。

○鄭喬林本卷五「関雲長延津誅文醜」

劉興我本	楊美生本	鄭喬林本	致和堂本	嘉慶七年本
玄德曰、容伸一言而死。操素與備有仇、備雖潰散、必有報仇之日。今日知備在明公處、必協力攻之、故使関羽誅殺二將、公知必怒、此是曹操借公手而殺備也。	玄德曰、容伸一言而死。操素與備有仇、備雖潰散、必有報仇之日。今日知備在明公處、必協力攻之、故使関羽誅殺二將、公知必怒、此是曹操借公手而殺備也。	玄德曰、容伸一言而死。操素與備有仇、備雖潰散、必有報仇之日。今日知備在明公處、必協力攻之、故使関羽誅殺二將、公知必怒、此是曹操借公手而殺備也。	玄德曰、容伸一言而死。操素與備有仇、備雖潰散、必有報仇之日。今日知備在明公處、必協力攻之、故使関羽誅殺二將、公知必怒、此是曹操借公之手而殺備也。	玄德曰、容伸一言而死。操素與備有仇、備雖潰散、必有報仇之日。今日知備在明公處、必協力攻之、故使関羽誅殺二將、公知必怒、此是曹操借公手殺備也。

惟明公思之。(此是 玄德梟雄処。) 紹曰、 玄德之言是也。 (カッコ内の文字は 小字双行。)	惟明公思之。(此乃 玄德梟雄処。) 紹曰、 玄德之言是也。 (カッコ内の文字は 小字双行。)	惟明公思之。 紹曰、 玄德之言是也。	惟明公思之。(此玄 德梟雄處。) 紹曰、玄 德之言是也。 (カッコ内の文字は 小字。)	惟明公思之。 紹曰、 玄德之言是也。
--	--	--------------------------	---	--------------------------

この例を見ると、劉備のセリフの後、致和堂本には「此玄德梟雄處」の文字があり、その後には袁紹のセリフが続く。鄭喬林本と嘉慶七年本には「此玄德梟雄處」の文字はなく、劉備のセリフの後すぐに袁紹のセリフが続く。これは先とは逆に、鄭喬林本が嘉慶七年本と文章が近く、致和堂本が劉興我本・楊美生本と同じになっている例である。しかし、この例の中で鄭喬林本・嘉慶七年本に見えない「此玄德梟雄處」の文字は注釈に類する内容で、前後の物語の進展と直接関わりがない。しかもこの一句は、小字双行になっているか本文の通常の内容より小さく書かれているかしており、それぞれの版本が成立する時にそれぞれにおいて同じように削除することも十分にあり得る。この例のように、劉興我本・楊美生本が致和堂本と一致し、かつ鄭喬林本と嘉慶七年本が一致する例は、いくつも見られる。しかしながらいづれも注釈に類する文であったり、引用詩であったりして、それぞれの版本成立時にそれぞれの版本が同様に削除可能なものである。必ずしも版本の継承過程から生じる文章の違いとは限るまい。

以上の例から見ると、「先繁後簡」小グループ内において、鄭喬林本は致和堂本に最も近いと考えられる。その一方で、鄭喬林本には鄭喬林本独自の文章がある。例をいくつか見てみよう。

曹操が徐州を攻めようとしていると、呂布は兗州を攻め、濮陽を占拠した。曹操はその知らせを聞き、兵を率いて濮陽に行った。曹操は濮陽の西の砦が守備が手薄なのを見て、夜襲をかけた。呂布は陳宮の計略に

従い、高順・魏續・侯成に守らせ、曹操軍と戦った。夜が明けようとする頃、呂布は兵を整えて西の砦にやってきた。曹操軍は敵わず、呂布軍に四方を囲まれ、矢が雨のように射かけられた。曹操は脱出する術がない。

○鄭喬林本卷二「呂奉先濮陽大戰」

劉興我本	楊美生本	鄭喬林本	致和堂本	嘉慶七年本
典章大叫，主公勿憂，隨我步行，低頭冒箭而走。布軍能射者數十騎近前，典章飛戟刺殺數人，衆皆走散。典章復回，飛身上馬，提雙戟殺來。郝、曹、成、宋四將不能抵當，各自逃去。典章殺敵散軍，救出曹操。	典章大叫，主公勿憂，隨我步行，低頭冒箭而走。布軍能射者數十騎近前，典章飛戟刺殺人，衆皆走散。典章復回，上馬，提雙戟殺來。郝、曹、成、宋四將不怯抵當，各自逃去。典章殺敵散軍，救出曹操。	典章大叫，主公勿憂，隨我步行，低頭冒箭而走。布軍能射者數十騎近前，	典章大叫，主公勿憂，隨我步行，低頭冒箭而走。布軍能射者數十騎近前，典章飛戟刺殺數人，衆皆走散。典章復回，上馬，提雙戟殺來。郝、曹、成、宋四將不能抵當，各自逃去。典章殺敵散軍，救出曹操。	典章大叫，主公勿憂，隨我步行，低萬回前而走。布軍能射者數十騎近前，典章飛戟刺殺數人，衆皆走散。典章復身上馬，提雙戟殺來。郝、弱、成、宋四將不能抵當，各自逃去。典章殺敵散軍，救出曹操。

典章は呂布軍の放つ矢から曹操を守り、戟を手にとって戦い、曹操を救出した。この例を見ると、劉興我本・楊美生本・致和堂本・嘉慶七年本に見える「典章飛戟，刺殺數人，衆皆走散。典章復回上馬，提雙戟殺來，郝、曹、成、宋四將不能抵當，各自逃去」という文章が、鄭喬林本にはない。鄭喬林本の文章は、典章が曹操に向かって叫び、呂布軍の「能射者」が近づいてきた描写の後、「能射者」が矢を射る記述がなく、

文意は何とか通じるけれども、いささか唐突な感じがする。そして鄭喬林本に見えない文章は二度出てくる「典章」二字に挟まれた部分であり、鄭喬林本の同詞脱文による誤りだと考えられる。これは鄭喬林本が成立する時に生じた誤りだろう。

さらに次のような例がある。劉備は張飛に徐州を守らせ、酒を飲まないよう戒めて、関羽とともに袁術討伐に出て行った。その後張飛は宴会を開き、諸將と酒を飲んだ。曹豹が飲まないとすると、張飛は怒り、曹豹を罵った。曹豹は呂布のもとへ逃げて行った。陳宮は呂布に、この機会に乗じて徐州を奪うことを進言した。呂布が軍を率いて徐州まで来ると、張飛は大いに酔い、戦える状態ではなく、東門から逃げて行った。

○鄭喬林本卷三「呂布月夜奪徐州」

劉興我本	楊美生本	鄭喬林本	致和堂本	周日校本
曹豹見飛 單騎，便引 數騎來趕。 飛見豹 來大怒， 挺矛 迎。 豹 敗走， 飛趕 上， 刺豹 馬下。飛 城 于 外招呼，士卒出城， 跟飛 望淮南而 去。 布得徐州， 安撫居民訖，念玄德	曹豹見飛 單騎，便引 數騎來趕。 飛見豹 來大怒， 挺矛 迎戰。 豹 敗走， 飛趕 上， 刺豹 馬下。飛 城 于 外招呼，士卒出城， 跟飛 望淮南而 去。 布得徐州， 安撫居民訖，念玄德	曹豹見飛 單騎，便引 數騎來趕。 飛見豹 來大怒， 挺矛 迎戰。曹豹 走， 飛趕 上， 刺豹 馬下。飛 城 于 外招呼，士卒出城， 跟飛 望 南而 去。	曹豹見飛 單騎，便引 數騎來趕 飛見豹 來大怒， 挺矛 迎戰。豹 敗走， 飛趕 上， 刺豹 馬下。飛 城 于 外招呼，士卒出城， 跟飛 望淮南而 去。 布得徐州， 安撫居民訖，念玄德	曹豹見飛無十數人護 送， 引百十人 趕來，飛見豹 大怒，拍馬來 迎。 豹戰三合敗走， 飛趕到河邊，一鎗 刺豹，連人帶馬，死 于河中。 飛於城 外招呼，士卒出城者， 盡隨 飛投 淮南而 去。 呂布 城中 安撫居民，

兄弟之情，令軍 百人守把玄德宅門，諸人不許 輒入。	兄弟之情，令軍 百人守把玄德宅門，諸人不許 輒入。	兄弟之情，令軍 百人守把玄德宅門，諸人不許 輒入。	兄弟之情，令軍 百人守把玄德宅門，諸人不許 輒入。此是呂布弟兄之情也。却
說張飛 至盱眙，來見玄德，呂布夜襲徐州之事。	說張飛 至盱眙，來見玄德，呂布夜襲徐州之事。	說張飛 至盱眙，來見玄德，呂布夜襲徐州之事。	說張飛引數十騎，直到盱眙，來見玄德，說曹豹獻門，呂布夜襲徐州。

曹豹は張飛と戦い、張飛に斬られた。張飛は淮南に向けて行き、盱眙までたどり着き、劉備に徐州で呂布の夜襲に遭ったことを告げた。この例を見ると、鄭喬林本はその他の『三国英雄志伝』三本に比べて文章が短くなっている。すなわち「布得徐州，安撫居民訖，念玄德兄弟之情，令軍百人守把玄德宅門，諸人不許輒入」の文が脱落して、呂布が徐州の民を落ち着かせ劉備の家族を保護する描写がない。繁本系の周日校本にはこの描写はあり、これが『三国志演義』の本来の形であろう。しかし鄭喬林本にはこの描写はないものの文意は通じることから、必ずしも鄭喬林本の誤りではなく、鄭喬林本が成立する時に、独自にこの一段を削除したのかもしれない。

以上の二つの例は、いずれも鄭喬林本の文章がその他の『三国英雄志伝』諸本よりも短くなっているもので、鄭喬林本が成立する時に書き改められたと考えられる。

これとは逆に、鄭喬林本の文章がその他の『三国英雄志伝』諸本より長くなっている例もある。劉備は諸葛亮と面会しようとする諸葛亮の草庵を訪れたが、一度目も二度目も会うことがかなわなかった。三度目に訪れた時に諸葛亮は家にいたが、昼寝をして眠ったままだった。劉備は関羽と張飛を門の所で待たせていた。

○鄭喬林本卷七「定三分諸葛亮出茅廬」

<p>劉興我本</p>	<p>玄德徐步而入， 見孔明 仰臥于 竹榻之上， 侍立 堦 下。</p>	<p>張飛大怒， 出與雲長曰，這 先生如此傲人。</p>	<p>卧 不起。 我去 庄後放 把火，看他起也 不起。雲長急 止住。 却說玄 德凝望堂上，</p>
<p>楊美生本</p>	<p>玄德徐步而入， 見孔明 仰臥于 竹榻之上， 侍立 堦 下。</p>	<p>張飛大怒， 出與雲長曰，這 先生如此傲人。</p>	<p>卧 不起。 我去 庄後放 把火，看他起也 不起。雲長急 止住。 却說玄 德凝望堂上，</p>
<p>鄭喬林本</p>	<p>玄德隨步而入， 但見孔明 仰臥于 竹榻之上。玄 德叉手侍立于堦 下。</p>	<p>張飛大怒， 出與雲長曰，這 先生如此傲人。 俺哥儿侍立 在堦下，那廝高 卧 不起。</p>	<p>德凝望堂上， 見先生 將 欲起来，又朝裏 不息。却說玄 德凝望堂上，</p>
<p>致和堂本</p>	<p>玄德徐步而入， 見孔明 仰臥于 竹榻之上， 侍立 堦 下。</p>	<p>張飛大怒， 出與雲長曰，這 先生如此傲人。</p>	<p>卧 不起。 我去 庄後放 把火，看他起也 不起。雲長急 止住。 却說玄 德凝望堂上，</p>
<p>嘉慶七年本</p>	<p>玄德徐步而入， 見孔明 卧于 竹榻之上， 侍立 堦 下。</p>	<p>張飛大怒， 出與雲長曰，這 先生如此傲人。</p>	<p>卧 不起。 我去 生後放 火，看他起也 不起。雲長急 止住。 却說玄 德凝望堂上，</p>
<p>周日校本</p>	<p>玄德徐步而入， 縱目觀之，自然 幽雅。見 先生仰臥於草堂 几榻之上，玄 德叉手 立於堦 下。將及一時， 先生未醒，關張 立，又不見動靜 入見玄德，猶然 侍立。張飛大怒， 與雲長曰，這 先生如此傲人。</p>	<p>見俺哥哥侍立於 堦下，那廝高 卧推睡不起。等 我去庵 後放一 把火，看他起 不起。雲長急忙 扯住，飛怒氣 未息。却說玄 德凝望堂上， 見先生翻身將及 起，又朝裏</p>	<p>德凝望堂上， 見先生翻身將及 起，又朝裏</p>

忽 見先生竟来, 口 念 日, 大夢誰先覺, 平 生我自知。草堂 春睡足, 窗外日 遲遲。	忽 見先生竟来, 口 念 日, 大夢誰先覺, 平 生我自知。草堂 春睡足, 窗外日 遲し。	忽 見先生竟来, 口 念詩句日, 大夢誰先覺, 平 生我自知。草堂 春睡足, 牕外日 遲し。	壁睡着。童子 與玄德曰, 且不可驚寢。 又立一個時辰,
忽 見先生 口 念 日, 大夢誰先覺, 平 生我自知。草堂 春睡足, 牕外日 遲遲。	忽 見先生竟来, 自念 日, 大夢誰先覺, 平 生我自知。草堂 春睡足, 窗外日 遲し。	忽 見先生竟来, 口 吟 詩 日, 大夢誰先覺, 平 生我自知。草堂 春睡足, 窓外日 遲遲。	壁睡着。童子欲 報, 玄德曰, 且不可驚動。 又立一箇時辰, 玄德渾身倦困, 強支不辭。孔明

この例では、「英雄志伝グループ」諸本の中で鄭喬林本のみその他の『三国英雄志伝』より文章が長くなっている。すなわち、鄭喬林本には見える「玄德又（「又」字の誤り）手・「見先生将欲起来，又朝裏壁睡着。童子與玄德曰，且不可驚寢。又立一個時辰」の文章が、劉興我本などその他の『三国英雄志伝』には見られない。この文章を仔細に見てみると、鄭喬林本に「童子與玄德曰」の文字があつて、この「曰」字の後は童子のセリフでなければならぬ。しかし後に続いて「且不可驚寢」という五文字は、内容からすると劉備のセリフのはずである。すなわち鄭喬林本の文章では意味が通じなくなっている。そこで二十四卷系の周曰校本を見ると、周曰校本にもこの一段の文章は見え、さらに諸葛亮が寢返りを打った後に「童子欲報，玄德曰」の文字があり、意味の上で全く問題がない。繁本系の文章に同様の文字があつて文意上問題はなく、鄭喬林本が繁本系より数字少なく文意が通じなくなっているのは、鄭喬林本の文章が繁本系から作ら

れる時に生じた誤りであって、鄭喬林本がその他の『三国英雄志伝』の文章に基づいて独自に文章を補充したのではないだろう。しかもこの一段の描写は、諸葛亮が目覚ましそうな様子をしながら寝返りを打って眠り続け、童子が起こそうとすると劉備がそれを止め、その後しばらくして諸葛亮がやっと目を覚ます、というものである。このように諸葛亮が目覚ますのを劉備がずっと待ち続けているという描写は、読者に対して大変イライラさせる効果があり、文章・内容は豊かで文学性も高くなっている。周曰校本のような文章こそが、『三国志演義』の本来の様な相なのであろう。劉興我本・楊美生本・致和堂本・嘉慶七年本の文章にはこのような描写はなく、周曰校本のような強い印象のある文章にはなっていない。文章が簡略化されてこのような文章が成立したのであろう。鄭喬林本は間違いなく「英雄志伝グループ」に属する版本であるが、この一段に限って言えば、むしろ二十四卷本系に近い。鄭喬林本の文章についての一つの大きな問題点であろう。

さらに次のような例がある。曹操は呂布に手紙を送り、袁術を討伐するよう催促した。その時袁術の使者韓胤がやって来て、双方の子供の婚姻のために呂布に淮南へ来るよう言った。呂布は曹操の申し出に同意し、韓胤を捕らえて曹操に返事を送った。一方で曹操は陳登を広陵太守に命じて、共に呂布を謀ろうとした。陳登は承諾し、徐州に帰って呂布に会った。呂布は陳登が曹操に対して呂布を徐州の牧にすることを願い出なかったことを知り、また陳登は呂布に袁術との婚姻の話を断らせようとした。呂布は何も得るものもなく、大いに怒り、陳登を斬ろうとした。

○鄭喬林本卷三「曹操興兵征張綉」

劉興我本	楊美生本	鄭喬林本	致和堂本	周日校本
登笑曰、吾見曹公 說將軍、辟如養 虎。當飽其肉、不飽 則將噬人。公笑曰、 吾待温侯 辟如養鷹。 飢則 為用、飽則 飛去。	登笑曰、吾見曹公 說將軍、辟如養 虎。當飽其肉、不飽 則將噬人。公笑曰、 吾待温侯 辟如養鷹。 飢則 為用、飽則 飛去。	登笑曰、吾見曹公 說將軍、辟如養 虎、當飽其肉、不飽 則將噬人。曹公笑曰、 吾待温侯 辟如養鷹。 飢則 為用、飽則 飛去。 某問誰為狐兔。操曰、 孫策、袁紹、 劉表、劉璋、 張魯、未除故也。	登笑曰、吾見曹公 說將軍、譬 養 虎、當飽其肉、不飽 則將噬人。曹公笑曰、 吾待温侯 譬如養鷹。 飢則 為用、飽則 飛去。	登 曰、吾見曹公把 將軍說了、譬如養 虎、當飽其肉、不飽 則將噬人。曹公笑曰、 不如卿言。吾待温侯 如養鷹耳。狐兔未 息、不可先飽。飢則 為用、飽則 去。
布擲劍 曰、曹公 知我。	布擲劍 曰、曹公 知我。	布擲劍 曰、曹公 知我。	呂布擲劍 曰、曹公 知我。	布擲劍笑曰、曹公 知我意也。

この例を見ると、鄭喬林本の文章は劉興我本・楊美生本・致和堂本に比べて長くなっている。たとえば、鄭喬林本の文章中に見える「某問誰為狐兔。操曰、孫策、袁紹、劉表、劉璋、張魯、未除故也」という一文は、劉興我本など三本には見えない。しかし劉興我本など三本の文章でも意味は通じる。むしろ鄭喬林本の文章がその他の本より長くなっていることによって、「狐兔」の二文字が突然現れて、「某問誰為狐兔」の一句の意味が分かりづらくなり、鄭喬林本の文章に問題があるように思える。そこで周日校本を見てみると、鄭喬林本の文章中にも見られた一文は周日校本の中にも見え、さらに鄭喬林本よりも詳しくなっている。鄭喬林本のみ見える文章は、周日校本のような繁本系の文章に基づいていることに間違いあるまい。さら

に、周日校本には「狐兔未息」の一句があり、その後の「某問誰為狐兔」の一句と呼応して、文章の意味がはつきりしている。だとすると、周日校本のような文章が『三国志演義』のもとと形であり、周日校本のような文章に基づいて簡略化して、鄭喬林本のような文章が成立したのであろう。その時に「狐兔」という語が前後で呼応しない誤りが生じたのであろう。その後文意が通じないことによって、鄭喬林本のような文章をさらに簡略化して、劉興我本など三本の『三国英雄志伝』のような文章が成立したのではないだろうか。すなわち、鄭喬林本の文章は劉興我本よりも古い様相を留め、繁本系の文章から『三国英雄志伝』の文章が成立するまでの過渡期のような状況を示している。

先に挙げた「定三分諸葛亮出茅蘆」の例では、鄭喬林本と二十四卷系の文章がよく似ていた。この「曹操興兵征張繡」の例は、鄭喬林本の文章が二十四卷系と一般的な『三国英雄志伝』の間にあることを示している。鄭喬林本は確かに「英雄志伝グループ」の「先繁後簡」小グループに属する版本であるが、鄭喬林本の文章は一般的な『三国英雄志伝』の文章よりもより古い様相を留めている。これは何を意味しているのだろうか。

第一の可能性は、「英雄志伝グループ」の中で「先繁後簡」小グループが先に成立し、その後で完全簡本『三国英雄志伝』が成立したというものである。中国古典小説の版本変遷過程では、通常繁本から簡本が成立するものである。¹⁴もし「先繁後簡」小グループが先に成立したのであれば、この原則に適合することになる。しかし現存する「先繁後簡」小グループはすべて清刊本であり、明刊本は存在しない。一方で完全簡本『三国英雄志伝』の明刊本には劉興我本・劉榮吾本・楊美生本の三本が存在している。もちろん、現存している版本が明清時代当時存在していた版本全てであるわけではない。しかし現存する版本の状況は、明清時代当時の版本の流伝の状況がある一定程度は反映しているとは言えるだろう。だとすると、現存資料で考

える限り、明代末期に「先繁後簡」の『三国英雄志伝』の版本が存在していた可能性は低いだろう。

また、「先繁後簡」『三国英雄志伝』の文章は、冒頭五則の文章は二十四卷系に類似しており、第六則から第十二則までの文章は二十四卷系の影響を強く受けているものであった。すなわち、第一則から第十二則まで（二十卷本の巻一に相当する）の文章は、二十四卷系に近いものである。そして第十三則以降は完全簡本『三国英雄志伝』も「先繁後簡」の『三国英雄志伝』も文章はおおよそ一致する。もし「先繁後簡」が先に成立したのであれば、完全簡本『三国英雄志伝』が成立する時に、第十三則以降の文章の簡略化の程度に合わせて第十二則以前の文章を簡略化しなければならない。これはやはりたいへん手間のかかる作業であろう。

以上の二つの理由から、「先繁後簡」小グループが先に成立し、完全簡本『三国英雄志伝』が後から成立した可能性は低いと考える。

第二の可能性は、鄭喬林本（あるいは比較的近いその祖本）が成立する時に、二十四卷系の版本に従って完全簡本『三国英雄志伝』の巻一の文章を補ったというものである。鄭喬林本はその他の『三国英雄志伝』に比べて文章が長くなっているところが数十箇所あるが、その最も長いものでも数十字、短いものは数字程度のものであって、一つのまとまった故事・物語のような一定の長さのあるものではない。また鄭喬林本の文章の方が長くなっているも、その他の『三国英雄志伝』の該当部分の文章の意味が必ずしも通じなくなっているわけではない。むしろ先に挙げた「曹操興兵征張繡」の例のように、鄭喬林本の文章の方に誤りのあるところもある。二十四卷系版本の文章からわざわざ数字から数十字程度の文章を抜き出して『三国英雄志伝』の文章を補うのは、やはりかなり面倒な作業ではないだろうか。したがって、鄭喬林本が二十四卷系版本に従って『三国英雄志伝』の文章を補った可能性は大きくないと考える。

第三の可能性は、鄭喬林本の祖本は「先繁後簡」の祖本が成立する早い段階で分岐してできたものだといいことである。二十四卷系版本の中の一つに基づいて新たな版本の編集を開始し、『三国英雄志伝』の中の一冊の影響を受けて「先繁後簡」の祖本が成立した。⁽¹⁶⁾鄭喬林本の祖本は「先繁後簡」祖本が成立しようとしている時期に現れた過渡期の一冊であり、そのため二十四卷系版本の様相を留めているのであろう。鄭喬林本は確かに「英雄志伝グループ」に属しながら、書名が「三国志伝」となっている。明刊本の劉興我本・劉榮吾本も「英雄志伝グループ」に属しながら、書名は「三国志伝」となっている。鄭喬林本の書名が「三国志伝」であるということも、比較的古い様相を留めていることの一つであろう。この第三の可能性は、先の第一・第二の可能性よりは大きいと思われる。

以上のように、鄭喬林本の文章には独特な性質がある。清刊本である鄭喬林本は、なぜ完全簡本『三国英雄志伝』より古い様相を留めているのか、現存資料の中でこの問題を解決するのは難しい。ここではとりあえずの結論を述べるに留め、鄭喬林本の本文の問題を完全に解決することのできる新たな資料が発見されることを期待したい。

四

鄭喬林本の文章をその他の諸本と比較してみると、興味深い例がいくつも見られる。

呂布は曹操に攻められ、下邳へ逃げて行った。曹操は下邳へ行き、城下に陣を敷いた。陳宮は呂布に対して、曹操の大軍が陣を敷く前に城を出て攻めると負けることはないと言った。しかし呂布の妻嚴氏と貂蟬が反対したため、呂布は城を出ようとしなかった。陳宮は許汜と王楷に袁術との縁談を進めさせ、そして袁術と

ともに曹操を挟み撃ちにしようとした。

○鄭喬林本卷四「白門樓曹操斬呂布」

劉興我本	布大喜， 修書， 命 汜、楷同行，	即	令張 遼、郝萌 一千兵送出隘口。	路， 遇関羽 有願	張遼分一半軍回， 郝萌引五百軍 馬，跟汜、楷去。 張遼 回，
楊美生本	布大喜， 修書， 命 汜、楷同行，	即	令張 遼	路， 遇関羽 有願	回，
鄭喬林本	布大喜， 修書， 命 汜、楷同行，	即	令張 遼、郝萌 引 一千兵送出隘口。	路， 遇関羽 有願	郝萌引五百軍， 跟汜、楷去。 張遼分一半軍回，
致和堂本	布 修書， 令 汜、楷去，		令張 遼、郝萌 送出隘口。	路， 遇関羽 有願	遼 回，
嘉慶七年本	布大喜， 脩書， 命 汜、楷同行，	即	令張 遼	路， 遇関羽 有願盼	回，
周日校本	布大喜，遣人 修書，就着 汜、楷去。許 汜曰，願得一軍 引路衝出，方可 得去。布教張 遼、郝萌兩箇引 兵一千送出隘 口。許汜、王楷 斃了呂布，張遼 在前，郝萌在後， 夜至三更，殺出 城去，抹過玄德 寨。衆將追趕不 迭，已出隘口。 張遼 一半軍回， 郝萌 五百人 馬，跟汜、楷去了。 張遼 回 來， 雲長攔 住， 各有願				

城。	遼得回	念之心 不戦
城。	遼得回	念之心 不戦
城。	遼得回	念之心 不戦
城。	遼得回	念之心 不戦
城。	遼得回	之心 不戦
城。	遼得回	眇之心、不肯下手。高順、侯成出城、引兵救獲、張遼回来了。

周日校本の内容は次のとおりである。呂布は許汜と王楷に自分の手紙を携えて袁術のもとへ行かせようとすると、許汜は呂布に敵の中を突進するために軍を出さよう願った。呂布は張遼と郝萌に一千の兵を率いて許汜と王楷を山間の狭い道まで送らせた。張遼と郝萌は許汜と王楷を守りながら、夜中二更に城を出て山間まで突き進んだ。郝萌の五百の軍と許汜・王楷は一緒に行き、張遼の軍は帰って行った。その途中張遼は関羽に出会ったが、関羽も張遼もお互い心に思うところがあり、戦おうとはしなかった。高順と侯成は張遼と関羽が対峙しているのを見て、兵を率いて張遼を救い、帰って行った。内容は十分備わっており、文章も分かりやすい。これがおそらく『三国志演義』の本来の様相なのであろう。ここに示した五種類の『三国英雄志伝』の文章を見ると、いずれも周日校本より文章が簡略化になっているが、その簡略化の程度はそれぞれ異なっている。

劉興我本の文章を周日校本と比べてみると、周日校本には見られる「許汜、王楷斃了呂布、張遼在前、郝萌在後、夜至二更、殺出城去、抹過玄德寨。衆將追趕不迭、已出隘口」の一文が、劉興我本にはない。この一文は二度現れる「隘口」二文字に挟まれた個所であるから、恐らく劉興我本による同詞脱文の誤りであろう。この一文の脱落によって劉興我本の文章は、呂布が張遼と郝萌に兵を出させ、それから張遼が半分の軍を率いて帰ってくる、ということになる。張遼が出て行った描写がないのにもかかわらず、張遼が帰って

ることになって、奇妙な内容になり、文意が通じない。楊美生本の文章は劉興我本よりもさらに短く、劉興我本に見える「郝萌一千兵送出隘口。張遼分一半軍回，郝萌引五百軍馬，跟汜、楷去。張遼」の一文が、楊美生本にはない。そのため楊美生本の文章は、呂布が許汜と王楷と一緒に出かけるよう命じると、突然張遼が出てきて、しかも関羽も突然現れ、二人が面会することになる。文章・内容は完全に破綻しており、文意は全く通じない。劉興我本と楊美生本を比べると、劉興我本に見えて楊美生本にはない一文は、二度出てくる「張遼」の二文字に挟まれた個所であることが分かり、だとすると楊美生本の文章は劉興我本のような文章にもとづいて、さらに同詞脱文の誤りが生じてきたものなのだろう。それならば、楊美生本の文章は『三国志演義』の本来の姿を直接簡略化したものではなく、『三国志演義』の本来の姿から二度の同詞脱文を経て成立したものだということになる。

鄭喬林本と劉興我本を比べてみると、「送出隘口」までは両本の文章は一致している。それ以降、劉興我本は「張遼分一半軍回，郝萌引五百軍馬，跟汜、楷去。張遼回」となり、鄭喬林本は「郝萌引五百軍，跟汜、楷去。張遼分一半軍回」となり、「遇関羽」以降はまた文章は一致する。両本の文章は、語句の順序に違いがある。すなわち、劉興我本では「張遼分一半軍回」の一句が先にあり、それから「郝萌引五百軍馬，跟汜、楷去」の一句がある。このような文章では意味が通じない。鄭喬林本の文章は、先に「郝萌引五百軍馬，跟汜、楷去」の一句があり、それから「張遼分一半軍回」の一句がある。このような文章は、周日校本に比べればいささか唐突な感があることも否めないが、文意は通じる。これはおそらく鄭喬林本が成立する時に、文章を書き改めたのではないだろうか。鄭喬林本と劉興我本では、文章の長さ、用いられている語彙に大差はなく、ただ語句の順序が入れ替わっているだけである。鄭喬林本の文章は、周日校本と比べると繁簡の差があることは当然ながら、語句の出てくる順序も異なっている。これは、まず周日校本のような完

全な文章があつて、文章を簡略化する過程で同詞脱文の誤りを生じ、劉興我本のような文章が成立した。そして劉興我本のような文章では意味が通じないため、鄭喬林本が成立する段階で語句の順序を入れ替え、とりあえず文意が通じるようにした。このようにして鄭喬林本のような文章が成立したのではないだろうか。

さらに致和堂本の文章を見ると、劉興我本や鄭喬林本よりもさらに短くなつていて、楊美生本と比較的似た文章になつていて、楊美生本と近い関係にあるようにも思える。しかし致和堂本には劉興我本・鄭喬林本同様に「郝萌送出隘口」の一句があるが、楊美生本にはなく、このことから致和堂本と楊美生本は直接の関係はなさそうである。上述したように、致和堂本の文章は鄭喬林本と近い関係にあると考えられる。するとこの例に挙げた個所においても、致和堂本の文章は鄭喬林本とより密接な関係にあると見るべきであろう。そして、劉興我本と鄭喬林本の間で語句の順序が入れ替わっているところの文章は、致和堂本には見られない。致和堂本の文章は鄭喬林本のような文章に基づいて、劉興我本と鄭喬林本で語句の順序が入れ替わっている個所を削除するか脱落するかして成立したものであろう。

嘉慶七年本はさらに注意しなければならない。この例について言えば、嘉慶七年本は確かに「先繁後簡」小グループの一本であるにもかかわらず、その文章は楊美生本と完全に一致して、同じ「先繁後簡」小グループの鄭喬林本・致和堂本と異なっている。これは一つの大きな問題である。嘉慶七年本は成立段階が遅い版本であり、その文章も、嘉慶七年本独特な性質がある。したがつてこの点については、嘉慶七年本の性質について詳細に考察した後、解決できるものであろう。

以上、鄭喬林本の文章の性質と『三国志演義』版本の変遷過程における位置づけを論じてきた。鄭喬林本は簡本「英雄志伝グループ」の「先繁後簡」小グループの中の一本であり、『三国志演義』版本の変遷過程の中では、比較的遅い段階の版本である。しかしある部分では『三国英雄志伝』のより古い様相を留めている。そして鄭喬林本のその他の『三国英雄志伝』諸本より古いと考えられる文章は、二十四卷系と一定の関係があると考えられる。鄭喬林本にこのような性質がある以上、鄭喬林本というこの本は、『三国英雄志伝』の成立を考えて行く上で、大きな手がかりとなる、きわめて重要な版本である。筆者は以前、簡本「英雄志伝グループ」は二十卷繁本系から派生してできたと述べた¹⁸⁾。しかし鄭喬林本の文章には、二十四卷系の文章と類似しているところがある。だとすると、簡本「英雄志伝グループ」の祖本は二十四卷系とある一定の関係がある可能性が考えられる。簡本「英雄志伝グループ」の成立について、改めて考え直す必要があるだろう。

ところで現存する鄭喬林本はドイツ・ベルリンに蔵される。本論冒頭で述べたように、鄭喬林本の中には美玉堂本『三国英雄志伝』の一部分が紛れ込んでいる。現存する美玉堂本もまたドイツ国内（ワイマール、アンナ・アマリア公爵夫人記念図書館）に蔵されている。しかもワイマール所蔵の美玉堂本と鄭喬林本の中に紛れ込んでいる美玉堂本教葉は同版であり、印刷順序が異なる。すなわち、二種類の美玉堂本がドイツ国内に蔵されているのである。ドイツにはさらにヴェルテンベルク州立図書館所蔵の余象斗本がある。このように、現在ドイツには少なくとも三種類四本の『三国志演義』の版本が蔵されているのである。さらにヨーロッパ全体で言えば、イギリスには余象斗本・朱鼎臣本・劉榮吾本があり、フランスには李漁本¹⁹⁾があり、スペインとスイスにはそれぞれ葉逢春本²⁰⁾がある。これらの版本は刊行時期が明代嘉靖年間から清代中期までに渉る。このように多くの版本がヨーロッパ各地に伝えられているのは、たいへん興味深いことではない

だろうか。鄭喬林本はこうした版本の中の一つであり、『三国志演義』がどのようにヨーロッパに伝えられたかを考える際には、きつと重要な版本の一つになるだろう。

封面の記載に従えば、鄭喬林本は康熙二十三年の刊本である。『三国志演義』版本の変遷の中で、刊行年が決して早い版本ではない。しかし鄭喬林本の文章の性質と所蔵状況から言えば、その価値は非常に大きい。『三国志演義』諸版本の中で、確かに重要な意味を持つ版本なのである。

注

- (1) 『三国志通俗演義』二十四卷。上海図書館・石川武美記念図書館成實堂文庫・アメリカ合衆国議会図書館・イエール大学図書館等蔵。
- (2) 美玉堂本の巻一卷頭書名は、『新刻按鑑演義全像三国英雄志伝』で、二十卷本である。ドイツ・ワイマールのアンナ・アマリア公爵夫人記念図書館所蔵。鄭喬林本に美玉堂本の文章が紛れ込んでいることについては、中川諭「ドイツ・ワイマール所蔵『三国英雄志伝』について」(『三国志研究』第十五号、二〇二〇年) 参照。
- (3) 中川諭『三国志演義』版本の研究」(汲古書院、一九九八年)。
- (4) 魏安『三国演義版本考』(上海古籍出版社、一九九六年)。
- (5) この例は注(3) 前掲拙著の中で、簡本系統がさらに二つのグループに分かれることを示すために用いた個所である。
- (6) 『新刊校正古本大字音積三国志通俗演義』十二卷。イエール大学図書館・北京大学図書館(巻一、二、六、九、十二) 蔵。
- (7) 『音釈補遺按鑑演義全像批評三国志伝』二十卷。建仁寺両足院(巻一〜巻八・巻十九・二十)、ケンブリッジ大学図書館(巻七・八)、ドイツ・ヴェルテンベルク州立図書館(巻九・十)、オックスフォード大学図書館(巻十 一・十二)、大英博物館(巻十九・二十) 蔵。
- (8) 『新刻音釈旁訓評林演義三国志史伝』二十卷。ハーバード大学燕京図書館・ロンドン博物館図書館蔵。
- (9) 『新刻按鑑演義全像三国英雄志伝』二十卷。大谷大学図書館蔵。

- (10) 注(3) 前掲拙著。
- (11) 中川論「致和堂本『三国英雄志伝』について」(『立正大学人文科学研究所年報』第59号、二〇二三年三月、立正大学人文科学研究所)。
- (12) 『新刻按鑑演義京本三国英雄志伝』二十卷。張青松氏個人蔵。この本については、注(11) 前掲拙論参照。
- (13) 『新刻按鑑演義三国英雄志伝』二十卷。ハーバード大学燕京図書館蔵。ハーバード大学蔵本には封面があり、「大清嘉慶七年新鐫」と題しており、よってとりあえず「嘉慶七年本」と称することにする。ただし「嘉慶七年本」とは言っても、この本と行款が等しくかつ刊行年がハーバード大学蔵本より早いであろうと思われる本も存在する。この本と関連する版本については、稿を改めて論じたい。
- (14) 注(3) 前掲拙著第五章。
- (15) 『精鐫按鑑全像鼎峙三国志伝』二十卷。大英博物館蔵。
- (16) 「先繁後簡」『三国英雄志伝』が成立する過程についての推論は、注(11) 前掲拙論参照。
- (17) 注(11) 前掲拙論。
- (18) 注(3) 前掲拙著。
- (19) 『李笠翁批閱三国志』一百二十回。中国国家図書館・京都大学大学院文学研究科・フランス国立図書館等蔵。
- (20) 『新刊通俗演義三国志史伝』十卷。スペイン・エスコリアル修道院、スイス・ポドメール財団図書館蔵。

(二〇二三年十一月二十九日受理、二〇二三年十二月二十一日採択)

